

# かめやま万葉の森

東海道の宿場町がある亀山では、人の往来盛んななか、文学が育まれてきました。能（やぶらぎのうた）の煩野で望郷歌を残したとされる倭建命や鈴鹿山を詠んだ西行法師、室町時代に「正法（しょうぼう）寺山荘」に招かれた連歌師・柴屋軒宗長など、和歌の文化が花開きました。「かめやま万葉の森」では、これらを活かして、まちづくりや子どもの健全育成に取り組んでいます。



伊藤 宣之さん

**お問い合わせ**  
「かめやま万葉の森」  
亀山市椿世町152番地  
TEL0595-82-0796  
(代表 伊藤 宣之さん)

「かめやま万葉の森」とは、亀山市の歴史的文化的価値のあるスポットをまとめた呼び名であり、活動するグループ名。代表の伊藤 宣之さんは、和歌や歴史を活用しながら、まちづくりや環境保全、子どもの健全育成に取り組んできました。「佐佐木信綱顕彰会」にも所属し、文学の発展に貢献している伊藤さんにお話を伺いました。

——伊藤さんは和歌に造詣が深く、「佐佐木信綱顕彰会」の理事も兼ねていらっしゃるのですか。

伊藤：亀山周辺で詠まれた和歌は無数にあり、「万葉集」や「新古今和歌集」などにも鈴鹿川や鈴鹿山が登場します。そ

れほど歴史が古く、文化が生まれた場所なのでしょう。今でも、鈴鹿の山並み、関宿のまち、そして亀山城城跡など、人々を魅了する景色があります。明治時代には、短歌結社の「竹柏園（たけはら）」ができ、歌人であり国文学者の佐佐木 信綱の父・弘綱の指導のもと、作歌活動が盛んでした。和歌は短い言葉で日常の機微から季節の移ろい、将来の夢までを表現できます。子どもから大人まで幅広い世代に親しむ機会を提供するため、平成元（1989）年を亀山文化元年と位置付け、市民有志と「かめやま万葉の森」を設立しました。地域の和歌や歴史を活用しながら、本物の文化のまちづくりを推進しています。

——点在する文化的価値のある史跡や風景を「かめやま万葉の森」がつなぎ、「十二の道」を活動拠点にしているのですか。

伊藤：健康維持のために歩く道として整備し、これまでに多くの人に歩いていただきました。別名「まほろばの道」とも呼んでいますが、まほろばとは「素晴らしい場所」といった意味を持つ日本の古語です。そういった言葉や和歌の修辞である枕詞なども、未来に伝えていく価値のあるものです。

ある森にしていることと「日本一小さい文化祭」をテーマとし、地元小学校の児童にも来てもらっています。児童が森の活動で感じたことを「こころの花」としてまとめ、発表しました。亀山市の個性を子どもの健全育成に役立てたいと考えています。

——亀山市の個性にはどういったものがありますか。

伊藤：亀山は城下町ですが、城地は丘陵地を切り開いて整備し、谷筋を埋め立てて堀を造りました。安藤 広重の「東海道五十三次」に描かれた亀山宿の「雪晴」は、まちの特徴を象徴的に表してい

ると思います。

また、関宿の西の入口にあたる西追分に松の木を植えたこともあります。ここは東海道と大和街道の分岐点。坂下宿や鈴鹿峠を越えていく古の旅人は、西追分から峠を見上げ、この先の道の険しさに想いを馳せ、一息ついたことでしょうか。鈴鹿山や鈴鹿嶺は、和歌によく出てきますが、過去の文献を調べて、地域に関する事柄を残しています。

——子どもたちに和歌を発表する場を提供したりと、継承の活動も積極的です。

伊藤：鈴鹿市の小学校に出向いて授業

で和歌を教えたりしますし、児童がつくった和歌を教育委員会を通して展示会をすることもあります。

地域の小学校に『万葉集』に詠まれている花木を植えていきたいという想いがあります。「かめやま万葉の森」で学び合って自然から知識を得てもらったり、文学に親しむ環境をつくらせていくのが、活動のめざすところです。

——和歌を通して文学の振興と充実を図り、それを未来へ継承することで、魅力ある亀山のまちの発信にもつながっています。

インタビュー…中村 元美



「かめやま万葉の森」と「十二の道」の図※



「かめやま万葉の森」の「うぐいすの森」



「東海道五十三次」に描かれた亀山宿の「雪晴」のことも紹介している案内板



関宿の西追分に茂る松の木

※印の写真は取材先から提供していただきました